

3年間を振り返って

看護学科第39期

並木 梓

入学当初、私の人見知りという性格もあり、クラスメイトと関わることにすごく消極的でした。そのため、授業のグループワークはとても苦手で、自ら進んで発言をすることは少なかったです。また、学校と仕事の両立であったため、仕事では、准看護師として多くの知識を身につけなければならない中、馴染めていなかったクラスで、看護師になるための勉強をしていくことに多くの不安を抱えていました。

入学から間もなくすると、授業の一環として、人間関係トレーニングがありました。授業では、グループワークが多くあった中、私は自分の殻に閉じこもってばかりで、積極的に参加できていませんでした。しかし、そんな私に対して、グループメンバーが気にかけてくれたことで、私は、自分の殻に閉じこもってばかりでは駄目なのだと思えることができました。

2年生では、授業の一環として、オーストラリア研修がありました。私は、国際看護係でもあり、同じ系のクラスメイトばかりに仕事を任せてはいけないと思い、積極的に係の間でコミュニケーションを図りました。その中で、他者に対して少しずつ自分の意見を伝えられるようになりました。また、異国の地で学びを深めることにみんな不安な思いを感じていたと思います。だからこそ、グループメンバーで協力し合わなければいけない、自分の意見を伝えることに消極的ではいけないのだと考えることができました。

コロナ禍で、臨地での実習は限られてしまいましたが、実習で学生として患者さんと関わらせて頂くことが、どれだけ素晴らしいことかを感じることができました。患者さんに対して看護を行う上で、不安や緊張だけでなく、何度もつまずき、悩みました。そんな時に、教員から「グループで相談事はしているの」と声をかけられました。実習のグループはみんな仲が良く、1度話すとおしゃべりが止まらない程でした。しかし、教員にかけられた言葉から、ただ仲が良いだけでなく、相談できるグループでなければならないと考えることができました。グループカンファレンスの議題として、患者さんに関わり、看護を行う上で、困っていることや悩んでいることをあげ、グループで話し合いました。それぞれ、得意なことや苦手なことがあるため、お互い

が支え合うことが大切なのだと実習を通して気づくことができました。臨地実習で一番印象に残っているのは、老年看護学実習です。コロナ禍であったため、患者さんに関わる時間も限られており、感染予防のため、距離を保つコミュニケーションという形でした。それでも、患者さんに「寄り添う」ということは、看護において必要不可欠であると改めて考えることができたからです。

高校卒業後の、看護学生生活の5年間はとても長かったです。准看護師として働き、看護師になるための勉強をしたこの3年間は特に、何度も看護師には向いていないのだと考えたこともありました。それでも私が、3年間頑張ることができた理由が2つあります。1つ目は、今まで関わらせて頂いた患者さんからの言葉です。患者さんは私のことを学生として認めてくださり、「頑張りな」「優しい看護師さんになってね」と声をかけてくださりました。2つ目は、所属しているクリニックの院長先生をはじめとするスタッフの励ましの言葉です。職場のスタッフ方々は私に対して、「学校どうなの」「頑張ってるね」と声をかけてくれて、いつも気にかけてくれていると感じることができていました。これらの言葉が、私にとって大きな力となりました。

私は、自分のことが嫌いで、自分に自信を持っていません。しかし、この前、仕事をしていた時にふと、仕事をしている自分が輝いて見え、仕事が楽しく感じました。看護師という素敵な職種に出会えて良かったです。これから、楽しいことばかりではなく、辛いこと、悩むことも多くあると思います。それでも、私を励ましてくれた方々に、看護師として、少しずつ恩返しをしていければいいなと思います。